

3 里親

ここに取り上げる里親の2事例は、平成24年（2012年）11月から12月にかけて現地に伺い、概要や取組等について聞き取り調査を実施したものです。

【事例8】鳥取県東部里親会 秋山さん（鳥取県 八頭郡）及び藤田会長

ソーシャル・スキル・トレーニングの一つとして、農作業・農業体験を

ア 概要等

① 秋山氏の農業経営の状況等

秋山宏樹・紗恵子ご夫妻（以下「秋山さん」という。）は、梨畑約1ha、柿畑約0.5haを経営している果樹農家です。梨は、二十世紀をはじめとして多品種を栽培し、収穫時期を8月から12月までに平準化しています。

② 里親としての経緯等

里親としては、平成24年（2013年）12月現在、小学6年と4年の兄弟を養育しています。最初に兄が6歳の時に児童養護施設からここへ措置変更され、弟も2年後の6歳の時に措置変更でここへ来ました。彼らは、同じ母親から生まれた兄弟ですが、幼い時期から大舎制の施設で他の多くの児童と一緒に育っていたので、ここへ来た当初から、兄弟という感覚が無かったそうです。

秋山さんには実子が3人いますが、既に社会人となっています。秋山さんは、「自分の」子育てが終わったので、次は「社会の子ども」を育てたいとの思いから里親を始めました。

現地（秋山さんのお宅）に伺った当日（12月26日）は、秋山さんと鳥取東部里親会の藤田会長に対応していただきました。



秋山さんのご自宅



秋山紗恵子さん

イ 「農」に関する取組

① 秋山氏の取組

子どもたちとは、梨の袋かけ等の農作業をすることがあります。農作業の報酬として1枚1円等の駄賃を渡していますが、1時間もたてば園内で虫取り等の遊びに興じています。

秋山さんは、農作業の教育的意義は十分あると認め子どもに農作業をさせていても、周囲からは作業を強要しているように見え、場合によっては虐待しているのではないかと心配しています。このため、家業とはいえどこまで農作業等の手伝いをさせたらいいのか、悩ましいところがあると言われています。



秋山さんの梨畑



秋山宏樹さん

② 鳥取県東部里親会の取組

里親会における農作業体験的な取組は、里親と里子だけでなく児童養護施設の子どもも交えて、タケノコ掘りや芋掘り等を実施しています。この芋掘りは、【コラム 1】にある社会福祉法人「トマトの会」の福谷さんのご厚意により実施しています。



藤田会長



タケノコ掘り

藤田会長は、平成 25 年度（2013 年度）の鳥取県東部里親会の行事として、秋山さんの梨園を活用して子どもたちに梨の袋かけ等の農作業を体験させるイベントを計画しています。

ウ 秋山さん及び藤田会長の考え・想い

農作業だけに限らず、どんなことでも子どもが働くことや体を動かすことは、子どもの生きる力につながると感じています（秋山さん）。

児童養護施設で育った子どもは、普通の社会生活が身についていないことがあるので、ソーシャル・スキル・トレーニングの一つとして、農作業・農業体験をさせることは良い取組だと思います（藤田会長）。

農家は、農地等のフィールドを持っているので、例えば週末里親となって、子どもに農作業・農業体験を行わせることは良いことだと思います。ただし、無理をして農作業をさせるとかえって嫌がる子どももいるので、まずは週末に「普通の生活」を体験させるだけでも良いのではないのでしょうか（藤田会長）。

コラム 1

土に親しむ交流（社会福祉法人「トマトの会」福谷さん）

社会福祉法人「トマトの会」理事長の福谷則枝さんは、就労継続支援 B 型事業の社会就労センター げんき工房（以下「げんき工房」という。）等社会福祉関係の施設及び事業を運営されています。

げんき工房では、らっきょうを栽培・加工して販売を行っているほか、地域の野菜等を活用した農園レストラン等を経営されています。

また、福谷さんは、昭和 52 年（1977 年）から里親をされており、これまでに 15 人の子どもを養育しています。全国里親会の評議委員や鳥取県里親会の会長等も務められ、社会的養護が必要な児童に対する制度の充実にも尽力されています。

さらに、児童養護施設の子どもたちや里親・里子等を畑に招待して、農作業体験を行うためにサツマイモの苗を 2,000 本植えています。サツマイモやらっきょうを栽培し、社会的養護が必要な児童や里親に対して、土に親しむ交流を通じた支援を行っておられます。



芋の苗植え（左が福谷さん）

【事例9】山口県里親会 ^{こうち}河内会長（山口県 美祢市）

「精神的な餓えと食の餓えがつながっている」「人間らしい食事が人間を育てる」

ア 概要等

河内美舟さん（以下「河内さん」という。）は、これまでに3人の実子と7人の里子を養育され、全国里親会理事（中国ブロック代表）や山口県里親会の会長を務められています。現在は、河内さんが理事長を務める社会福祉法人 同朋福祉会（以下「同朋福祉会」という。）が運営する小規模住居型児童養育事業ファミリーホーム「てつなぎ」において、様々な諸事情から家庭では暮らせない高校2年と1年の男子生徒2人を養育中です。



河内美舟さん

同朋福祉会は、ファミリーホーム「てつなぎ」の他に、特別養護老人ホームや障害者支援施設、クリニック等多くの福祉施設等を経営しており、平成23年（2011年）4月には山口市内に、認可保育所（乳児保育）「とものその保育園」と特定施設生活介護有料老人ホーム「Graceful ともの園」を併設型（同一建物内）で開設しています。



ファミリーホーム「てつなぎ」

11月21日に同朋福祉会を訪問し、河内さんにお話を伺いました。

イ 「食」や「農」に関する取組

① 子育てにおける食や調理体験等について

河内さんは、子どもに手作りの食事しか出してきませんでした。食事の時は、里子も実子も関係なく厳しく指導していたので、子どもたちは食べ物の好き嫌いがなく、歯の健康優良児で表彰された子もいました。ファミリーホームでも、食事の後片付けは子どもにさせています。これは子どもが将来、社会に出たときに必要なことを今のうちに身につけるべきと考えてのことです。



ファミリーホームの食卓

河内さんは、食事の時の子どもの様子を見れば、今日その子に何があったのか見当がつき、また、食事の食べ残しや片付けの様子等を見れば、子どもの満足感がよく分かるそうです。

また、「食」に関しては、学術的な理屈よりも、子どもと親と一緒に料理することが必要だと考えています。例えば、調理していて「お焦げ」を作ってしまったとき、子どもは「大人だって失敗することがあるのだ」ということを理解し、人を許すことを学ぶこともできると考えています。

② 里親会における農業体験等について

美祢市里親会は、里子・里親のレクリエーション活動に、【事例4】の児童養護施設「俵山湯の家」の子どもたちを招待して、薪でご飯を炊いたり、採れたての野菜を使った

料理を作ったりする体験学習等を行っています。

③ 同朋福祉会における農業体験等の状況

平成 16 年（2004 年）2 月から授産作業の一部として稲作を始めました。当初は、農家の方をお願いして農地を借りていましたが、近年は、農家の方が高齢化により水田の管理や草刈りができなくなっているため、無償で構わないので借りてほしいと依頼されるそうです。

今では、3 ha の耕作放棄地を活用して稲や野菜を栽培し、さらに収穫した作物を食材として加工し、地域に提供しています。

同朋福祉会の職員は農業経験がありませんでしたが、高齢で引退した農家の方が農業についていろいろと教えてくれました。さらに農業技術は、J A が開催する営農塾の講座で勉強するなど、市内の J A の支所の方にも教えてもらっています。

ウ 河内さんの考え・想い

① 「食」に対して

子どもにはしっかり食べさせることが重要であり、精神的な餓えと食の餓えがつながっているため、安心して食べることができる場所と時間が必要です。親がゆとりを持って料理していると、子どもの心にもゆとりが生まれます。

施設の子や里子に限らず一般の子どもでも同様に言えることですが、食事に関して目測で自分の量が分かる必要があります。食習慣がきちんとしている子どもは大丈夫です。また、食や料理だけでなく、何事も目分量で分かることが大切であり、そのためには自分で経験することが重要です。

経営している保育園でも食育には力を入れており、特に野菜の色を活用したカラフルな色彩の料理や匂いにもこだわっています。野菜の豊富な色彩は、日本の四季が影響しており、幼い時期の「食」や「農」の体験により、五感が養われます。

いろいろな問題の中心にあるのが家庭生活であり、その中でも特に重要なことが「食生活」であると考えています。

② 「農」に対して

農業を体験することにより、畑の土に触れ、水はけの善し悪しを自らが確認することになります。そして、場所により野菜の育ちに差があることが分かります。このことは、実際に体験してみなければ分からないことです。

農家の方は、農業の内側にいるから農業の価値が見えないところがあるのではないのでしょうか。また、当然のこととして気がつかない面もあるかもしれません。我々のように外部から農業を見た方がよく分かることがあると思います。

農業体験には時間と場所が必要で、自由参加のスタイルが良いと思います。例えば、子どもにプログラムを作らせて大人はそれをサポートする方が、取組としては定着するのではないのでしょうか。

4 地域若者サポートステーション

ここに取り上げる地域若者サポートステーション（以下「サポステ」という。）の4事例は、平成24年（2012年）11月から12月にかけて現地に伺い、概要や取組等について聞き取り調査を実施したものです。

【事例10】おかやま若者サポートステーション（岡山県 岡山市）

農作業を体験すると、3つの「たい力」（体力、耐力、対力）が身につく

ア 概要等

「おかやま若者サポートステーション」（以下「サポステおかやま」という。）は、岡山県内全域を対象としたサポステです。

サポステおかやまは、平成18年（2006年）からNPO法人「リスタート」（以下「リスタート」という。）が受託しています。リスタートの林理事長は、平成8年（1996年）に「岡山ひかりクラブ」を立ち上げ、民間支援団体として不登校や引きこもり児童に対する支援活動を開始しました。その後、支援対象者を引きこもりやニートに拡大し、自立支援活動を行う「リスタート」と団体名を変更して平成18年（2006年）に法人格を取得しています。

現地（サポステ及び農園）に伺った当日（11月13日及び12月10日）は、林理事長（サポステおかやま統括マネージャー）に対応していただきました。

イ 「農」に関する取組

リスタートは、岡山市が開設する市民農園「牧山クライנגアルテン」⁴を借りて、農業体験による就労支援を行っています。

平成21～23年度（2009～2011年度）は、岡山県の緊急雇用対策事業を活用して、農作業体験（ファーマー養成講座）を実施しました。ファーマー養成講座参加者計46名の中には、実家の農地を活用して就農した方が2名、農業法人に就職した方が2名、JAに就職した方が1名います。

緊急雇用対策事業に取り組んでいた平成21～23年度（2009～2011年度）は、座学を含めると農業や農作業に関することを毎日行っていました。平成24年度（2012年度）からは、緊急雇用対策事業が廃止となり規模は縮小しましたが、サポステの生活支援事業の中に組み込んで継続しています。平成24年度（2012年度）は、月に2回、農作業体験あるいは農地の管理に來ています。農作業体験は、1回につき2～3時間行っており、毎回15時には終わるようにしています。参加者の年齢は、10代後半から35歳くらいまでです。

リスタートのスタッフには心理士、社会福祉士、ス



クライングアルテンでの農作業

⁴ 【コラム2】を参照

クールカウンセラーがいるため、シフトを組んで必ず1名は農作業に入るようにしています。また、通信制高校の生徒の課外授業として農作業の参加を受け入れており、多い時には10名くらいが参加しています。

ウ 林統括マネージャーの考え・想い

農作業を体験することによって、「体力」、「耐力」、「対力（人に接する力）」といった3つの「たい力」が身につきます。また、自然が相手なので、現場での取組が計画・予定どおりにはいかないこともあり、そこから、変化に対応・適応する力や自発的に動く力が身についていると感じています。

農作業は、作業の工程（足跡）が分かるので、就労に向けた訓練としては最適です。他人と比較して作業の出来・不出来が一目瞭然に分かるので、自己客観視力を高める上でも役立ちます。

指導する側としても、農作業は、同一の場所で個人の状況や能力をまず見立て（アセスメント）し、更に訓練へと進めることができるので、非常に優れた手段といえます。一緒に長い時間作業するので、そこから各々の苦手なことやその要因といった様々なことが見えてきます。訓練不足が問題であれば、一定の訓練をすれば改善や解消につながりますが、そもそも、備わっている性質・能力には個人差がありますので、それぞれの人に合った就労を目指す必要があります。

農作業体験を通じて体験値・経験値が上がり、それが自信につながって働くきっかけになっている人を多く見てきました。将来的には、農業や環境の分野で理解のある方々に協力していただき、何らかの障害がある人たちにとって住みやすい環境・居場所をつくることができなにかと考えています。

コラム 2

岡山市民農園「牧山クラインガルテン」

岡山市民農園「牧山クラインガルテン」（以下「クラインガルテン」という。）は、岡山市が整備した市民農園です。年間使用料は、農園タイプや各農園の面積により異なります。①数区ごとに散水栓等が付いた個人向けの普通農園（大・中・小）及び果樹専用農園のほか、②水道・調理台を備えた「ラウベ」という小屋付きの農園、③区画ごとにバーベキュー用コンロと農具収納ベンチが付いたリフレッシュ農園、④車椅子で利用できるプランター農園があります。利用される方のニーズに合った農園タイプが選べるので、自分に合った農作業が行えます。また、管理人が常駐し、随時栽培相談を受け付けていますので、農作業の経験が全くない方でも、アドバイスを受けながら安心して野菜づくりを行うことができます。

リスタートは、若者の就労支援を目的に、クラインガルテンに約 200 m²の農地を確保しています。支援対象者は、車を持っていないので、最寄りの駅から歩いて行けるこのクラインガルテンは、比較的良好な条件にあると言えます。

リスタートの林理事長は、クラインガルテンでの農作業の実践の中から「社会性」や「協調性」等を体験し、また、農作物の収穫を通して「遊び」「驚き」を経験し、成長してもらいたいと考えられています。



管理センター



普通農園



ラウベ

【事例 11】ほうふ若者サポートステーション（山口県 防府市）

いきなり仕事に就くよりも、その前に農作業を体験することは、とても有効

ア 概要等

「ほうふ若者サポートステーション」（以下「サポステほうふ」という。）は、山口県の中部（防府市、山口市）と北部（長門市、萩市、阿武町）を対象としています。山口県内にはこの他に、県東部を対象とする「しゅうなん若者サポートステーション」と、県西部を対象とする「うべ若者サポートステーション」があります。

サポステほうふは、平成 19 年度（2007 年度）から NPO 法人「コミュニティ友志会」が受託しています。

現地に向った当日（11 月 30 日）は、松永総括に対応していただきました。

イ 「農」に関する取組

① 元気になれるハーブガーデン事業

「元気になれるハーブガーデン事業」は、平成 22～23 年度（2010～2011 年度）に実施された山口県の委託事業（サポステ支援事業）で、農業を活用した若者の就労支援です。平成 22 年（2010 年）当時、サポステほうふには、農業に詳しいスタッフがいなかったこともあり、病虫害に強く比較的栽培しやすい「ハーブ」に着目しました。ハーブの香りでストレス解消の「癒やしの効果」と、クッキーやケーキ等にも加工し若者の就労の場を創る、という目的も兼ねていました。当初は、農業委員会に相談したところ、農業を始めるには 30a 以上の面積が必要等と言われ、農地の確保に苦労しましたが、防府市が所有する農地（花木センター）を無償で借りることができました。ここでは、用水や農機具小屋も無償で使用できます。



ガーデン内のローズマリー

栽培技術は、県の職員で園芸療法の経験のある方や防府市内にある農業大学の先生から、ハーブの種類や土壌改良等について教えていただきました。さらに、農業技術＋指導力のあるスタッフに矯正施設で教育指導の経験がある方を雇用しました。

実習対象者は、20 歳代が大半で、コミュニケーション能力が乏しく「ひきこもり」に近い人です。彼らは、農作業はもちろん、土いじりの経験ありません。

実習期間は、3 か月を 1 クールとして、年 3 回（春～夏）（夏～秋）（秋～冬）、1 週間に 4 回（火、水、木、金）、午前中の 3 時間実施しましたが、冬期は栽培の作業が少なくガーデンの整備が中心でした。

② 働く体験セミナーin ハーブガーデン事業

県の委託事業「元気になれるハーブガーデン事業」が平成 23 年度（2011 年度）末で終了したので、これまで整備したハーブガーデンを活用して、平成 24 年度（2012 年度）からほうふサポステが独自に「働く体験セミナーin ハーブガーデン事業」を実施しています。

募集定員は、1 回 5 名程度（1 人のスタッフで対応できる人数）で、今回は 3 週間

を1クールとして毎月開催しています。

③ 収穫したハーブの活用状況

収穫したハーブを活用して、ハーブクッキーやケーキを作り、販売しています。これは、起業の一つとして戦略を考えて展開しています。



ハーブクッキー

サポステほうふでは、スイーツ製造の業者選定、ハーブの乾燥、商品のサンプリング作り、アンケート調査、レシピの確定、パッケージングまで、多岐にわたり慎重に検討しました。商工会議所や中小企業診断士からもアドバイスを受け、商品化や販売戦略等を検討しました。

このようなハーブの活用（加工・販売）の趣旨は、県の委託事業が終了した後のことを考え、ハーブガーデンから収入を得て、事業が自立することを目指したものです。

ウ 松永総括の考え・想い等

① 取組の効果等

実習生からは、「規則正しい生活ができるようになった」「自ら進んで行動に移せるようになった」「達成感を得た」「面倒くさいことにも、我慢して取り組むことができた」「仲間と出会い、お互い理解し合えた」「実習中に『よく頑張った』と褒められ、とても嬉しかった」等の感想が寄せられています。

このほか、「社会性を身につけた」「農作業を共同で行うことにより、チームワークがとれ、協調性と自発性が養われた」といった職業的自立に向けての頼もしい感想も出ています。

最も大きな効果は、自分に自信がついて「行動力」とビジネスマナー等の「社会人の基礎力」がついたことです。これまで社会に出られなかった若者がいきなり仕事に就くよりも、その前に農作業を体験することはとても有効だと考えます。

また、農業を実際にやってみると、その人にできることとできないこと（能力）の見極めができます。一般の会社等ではこのような見極めが難しいと思います。

② 取組の課題やポイント、今後の予定等

最大の課題は、農地の確保です。周辺に遊休農地が多いにもかかわらず、体験農園に必要な小規模の農地を借りることは困難です。このため、農地を有効に利用できる情報が必要だと思っています。

指導者については、「教育ができる者」と「農業が分かる者」の2者が必要ですが、両方を兼ね備えていなくても、例えば近所の農家の方とサポステのスタッフが協力する方法等も考えられます。このような取組は人件費がかかるので、農作業の持つ自立支援の力に着目した支援策（予算）があると助かります。

農業を活用した若者の就労支援・自立支援の取組が成功するポイントは、効果的なプログラムの作成能力だと思います。

サポステほうふは、他のサポステと比べて支援対象地域が広く、特に南北の移動距離があります。このため、サポステほうふから遠い萩市等は、対応が手薄な状況です。できれば「ハーブガーデン」を萩市でも実施したいと考えています。

【事例 12】東予若者サポートステーション（愛媛県 新居浜市）

農業体験は、就労へ向けたプロセスの入口としては非常に優れている

ア 概要等

「東予若者サポートステーション」（以下「サポステ東予」という。）は愛媛県の東予地域（新居浜市、今治市等）を対象としています。愛媛県内にはこの他に、中予地域と南予地域を対象とする「えひめ若者サポートステーション」があります。

サポステ東予は、平成 21 年度（2009 年度）から「イヨテツケーターサービス株式会社」が受託しています。

現地に伺った当日（12 月 19 日）は、濱田総括コーディネーターに対応いただきました。



サポステ東予の相談コーナー

イ 「農」に関する取組

サポステ東予では、農業を含む職場体験を実施していますが、この体験は 1 回に最長 5 日間で、同じところに何度も行くことは可能です。

サポステ東予では、職場体験に協力いただける農園を開拓し、その都度経費を支払い、職場体験等を実施しています。職場体験に協力いただいている農園は、果樹がほとんどです。収穫のみならず、草取り等年間を通じて何らかの作業があります。

昨年から今年にかけて、2 人が農業関係でアルバイト就労に至りました。雇用先はいちご農園で、最初は職場見学から始めましたが、興味を持つ者が多く、職場体験を経た後にハローワークに行き、最終的に 2 人が就労につながりました。2 人とも農家以外の出身です。このケース（いちご農園）では、農園の方が、特定の時期に限らずに、職場体験希望者の都合の良いときに連絡をしてもらえれば対応していただけるため、間口が広がったという要因もありました。



いちご農園

J A の農産物直売所での職場体験を通じて自信が持てるようになり、自ら応募してアルバイト就労まで至った者も 1 人います。当初は、商品を陳列棚に並べるなどの裏方の作業をしていましたが、徐々に接客等にも携わるようになり、就労に至ったケースです。

ウ 濱田総括コーディネーターの考え・思い等

① 取組の効果等

農業体験は、人と話す（コミュニケーションする）ことが苦手な者にとって、接客業等とは異なり、最低限のコミュニケーション（農家から作業の指導を受ける等）でも通じる面があることから、就労へ向けたプロセスの入口としては非常に優れています。

人とコミュニケーションを取ることが苦手といったウィークポイントがあっても、入っていきやすいのが農業だと考えています。また、サポステに来る若者（ニート）を見ていると、人とコミュニケーションを取ることが苦手だが、単純作業をこつこつとこなすことは得意な子が多いと思います。

② 取組の課題やポイント等

サポステ経由で（農業）就労に至ったケースは、アルバイト止まりです。そもそもハローワークでも農業関係の求人自体が少なく、繁忙期雇用のアルバイト等がほとんどです。このため農業生産法人等、農業関係の雇用の間口が広がれば良いと思います。

人とコミュニケーションを取ること等が苦手な若者を、安定的な就労に導くための最初の入口として農業は有効ですが、彼らが生業として農業をしていくことは、非常にハードルが高いのが現実です。独身のうちはともかく、結婚して家庭を持ち子どもを育てるとなると、アルバイトでは難しく、結局、他の業種に移らざるを得なくなります。

若者がもっと農業に進むためには、農業で生計を立てられるようになることが必要です。

【事例 13】 こうち若者サポートステーション （高知県 高知市）

農業は、比較的コミュニケーションを取らなくても作業が可能

ア 概要等

「こうち若者サポートステーション」（以下「サポステこうち」という。）は高知県の高知市を対象としています。高知県内にはこの他に、高知市以外の地域を対象とする「高知黒潮若者サポートステーション」があります。

サポステこうちは、平成 19 年度（2007 年度）から社会福祉法人高知県社会福祉協議会が受託しています。支援メニューとしては、農業体験のほかに、学習支援やビジネスセミナー、就活支援等があり、山登りのほか、企業、新聞社、日本銀行等社会の仕組みについて知る職場見学を行うこともあります。



サポステのある福祉交流プラザ

現地に伺った当日（12 月 19 日）は、中城総括コーディネーターに対応していただきました。

イ 「農」に関する取組

農業体験は、月に 2 回程度、大体は土曜日（又は金曜日）に 2 時間程度で実施して

います。体験に使う農地は、県立春野高校の使用していない実習農地を借り受けています。

参加者は、時期によりまちまちで、暑い時期や寒い時期は参加率が高くなりませんが、年間を通じると各回6～8人程度です。植え付けや収穫作業のほか、草取りや鳥獣被害防止用ネットの貼付け等の作業を年間通じて行っています。作物としては、野菜、いも、ゴーヤ、シシトウ等が主です。



農園のじゃがいも



サポステの農園

農業体験には、社会福祉協議会のスタッフが一緒に参加していますが、なかなか農園の手入れが行き届きません。一番困っているのは鳥獣害です。農園が山の麓にあることもあり、ハクビシン等が頻繁に出没します。

ウ 中城総括コーディネーターの考え・想い等

① 取組の効果等

農作業は、グループ活動の形態としては導入しやすく、例えば、草取り等でも達成感があります。中には体力づくりのために参加する者もいます。

農業体験は、コミュニケーション能力向上セミナー等のように、自立支援に直結するものではありません。農という場（フィールド）の中で、何をどうするのか、何ができるのかを感じさせ、共同作業や体力的な発散等を通じて、自分が活動することによって、自分の役割が見えてくるといった感覚を持つ時間とも言えます。

人とコミュニケーションを取ることは苦手だが、こつこつとやる作業が得意な子は多いので、サポステに来ている若者の多数は、農作業に向いています。

② 取組の課題やポイント等

若者の自立支援に携わっている我々から見ると、農作業は、サポステに来所している若者の能力を生かしやすいと考えられるので、農業に期待する部分は大きいです。

若者が農業に参画する機会を増やす方策を是非お願いします。現状では、農業に参画しようとしても敷居が高く、閉鎖的に見えます。

例えば、若者が農業をしたいと思って、耕作放棄地を見つけて貸してもらおうと思っても、誰の所有なのか等について確認することは容易ではなく、また、貸借等の手続をしようとしても、個人対個人のやりとりはなかなか難しい状況です。このため、耕作放棄地を信用できる機関（公的機関）等が間に入って管理し、活用したい者に貸し出すような仕組みを作ってはどうか。

サポステうちでも、若者の職業能力の回復を図り、就農につなげていきたいとは強く思っていますが、農作業をする意思はあっても、マッチする作業（仕事）が見つけられないというのが現状です。

就職先の一つとして、是非「農業」の間口を広げてほしいと考えています。

5 農業者、農園等

ここに取り上げる農業者、農園等の2事例は、平成24年（2012年）10月から11月にかけて現地に伺い、概要や取組等について聞き取り調査を実施したものです。

【事例14】畑人の森里農園 ^{はるさーのもり} 猪上 淳さん ^{いのかみじゅん}（広島県 三原市）

子どもたちは農業を体験して生きる力を培ってほしい！

山と山の狭間に田畑が広がる三原市高坂町真良地区。この自然豊かな集落に移住して、築150年の古民家で暮らす猪上淳さん（以下「猪上さん」という。）が新規就農した経緯と、【事例1】の児童養護施設「似島学園」の子どもたちとの交流（農業体験）の様子を紹介します。

（サラリーマンから有機農業へ）

猪上さんは、高校卒業後、栃木県の電機メーカーに就職していました。経済的には不自由の無いサラリーマン生活でしたが、心が満たされない日々であったとのこと。子どもの頃から農業に興味があったこともあり、平成17年（2005年）に7年間勤めた仕事を辞めて1年間は栃木県内の有機栽培を行っている農家の下で研修し、平成18年（2006年）から三原市高坂町で有機野菜を栽培している農家で修業しながら就農の準備を行っていました。

（畑人の森里農園の誕生）

平成19年（2007年）からは独立して自分の農園を「畑人の森里（はるさーのもり）農園」と名付けました。畑人とは沖縄の方言で「農業者」という意味です。

現在この農園において、有機栽培で水稲2ha、野菜0.5ha、ぶどう0.3haを栽培しています。



畑人の森里農園と収穫した野菜（にんじんや赤大根）

（子どもたちに農業体験を）

猪上さんは、2歳から高校卒業までを児童養護施設「似島学園」で過ごしました。これまでの経験から、猪上さんは、子どもが農業を体験すると「生きる力が養える」「将来の選択肢も増える」と考えていました。そこで、似島学園の子どもたちを自分の水田に招待して、田植や稲刈り等の稲作体験を行うことを計画しました。

この計画には、三原市青年農業経営者クラブのメンバーが協力し、同クラブ主催の「あぐり交流キャラバン」として平成24年（2012年）に開催されました。稲作体験と併



猪上淳さんと奥様

せて、ぶどうの袋かけやぶどう狩りも行われました。この時、猪上さんは「皆が知らなければ何も動かない」ことと情報発信の重要性を知りました。さらに、農業・農家の懐の深さも知ることになりました。

また、将来は、夏休みに児童養護施設の子どもたちを招待して、宿泊と連続した農業体験ができる農家民泊のような取組へと拡げていきたいと考えています。



ぶどう狩りの様子

【事例 15】^{かみなか}上中農園 ^{たけうちみちこ}武内紀子さん（広島県 安芸高田市）

天使たちの声が響く農園、エンゼルスランペットの森

戦国武将毛利元就の居城郡山城に代表される歴史と、中国山地の山々に抱かれ豊かな自然環境を有する安芸高田市吉田町。この地で、武内紀子さん（以下「武内さん」という。）は、【事例 3】のこぶしヶ丘学園をはじめ、広島県内の10か所ほどの児童養護施設の子どもたちを「上中農園」に招待して、野菜等の収穫体験の活動を行っています。この上中農園の武内さんと子どもたちの交流の様子を紹介します。

（実家の農地が「上中農園」に）

武内さんは、毎日、実家がある上中農園に出かけて、野菜等の栽培に汗を流しています。これは、今から 23 年前、荒れていた実家の農地を開墾するところから始まりました。復旧した農地は、武内さんの旧姓をとって上中農園と名づけました。

現在（平成 24 年（2012 年）10 月）、武内さんは 76 歳になりますが、約 1 ha の農地をほとんど 1 人で管理しています。しかも山間の農地であるため野生鳥獣の被害対策も大変な労力が必要です。このため、武内さんは朝から夕方まで、ほぼ毎日、この農園で作業をしています。



武内紀子さんの実家

（子どもたちに収穫体験を）

上中農園の作物は、全て子どもたちに収穫体験させるためのものです。武内さんは、四季折々の野菜や果物を栽培し、それぞれの作物が収穫時期を迎えると、広島県内の児童養護施設の子どもたちを招待しています。

春から夏にかけては、じゃがいも、すいか、とうもろこし、なす等が収穫できます。秋から冬には、栗やサツマイモ、だいこん、はくさい、チンゲン菜、広島菜、ほうれんそう、そしてキウイ等の果樹もあります。



上中農園のだいこん

（エンゼルスランペットの森）

児童養護施設との交流は、当時広島県庁に勤めていた武内さんの弟の提案が契機です。武内さんは「家庭で生活することができない様々な境遇の子どもたちに、ここで思い出に残る体験を味わってもらいたい」と考えています。



エンゼルスランペットと冬越し用の小屋

上中農園は、野菜や果樹だけでなく花木も多く植えています。特に「エンゼルスランペット」は数多くの品種がたくさん栽培されています。武内さんは、農園を訪れる子どもたちの笑顔が「天使」に見えることから、この「エンゼルスランペット」の栽培を始めました。このため、この農園は「エンゼルスランペットの森」とも呼ばれています。

（武内さんから見た子どもたちの反応や様子等）

この農園に来る子どもたちの反応や様子は様々で、喜んで農作業をする子もいれば、嫌々来ている子もいます。しかし、子どもたちは基本的に施設の外へ出る機会が少ないので、ここに来ることを楽しみにしている子が多いようです。特に「こぶしヶ丘学園」の子どもたちには人気があります。



上中農園の広島菜

子どもには、「自分が他人の役に立っている」と感じる体験や、大人に褒められたり、叱られたりする経験が大切だと思います。

ここに来るのが好きな子どもたちは、素直に育っていると感じます。

ここに来た当初は、態度が悪かった子が、見違えるほど優しくなったので、思わず抱きしめたこともありました。

児童養護施設の先生が熱心に農作業をするところは、その施設の子どもたちも進んで自らから農作業をしています。「親の背中を見て子は育つ」と感じました。

（上中農園を運営するための課題）

肥料や種苗代等に年間 40～50 万円の経費がかかっています。鳥獣被害対策の資材も自費で購入し、武内さんが直営で施工しています。さらに、エンゼルスランペットの冬越しのための小屋（倉庫）や、来訪者用のトイレも新築しています。

しかし、農作物は一切販売していないため、収益は全くなく、農園の維持にこれまでの自分の蓄え等をつぎ込



直営施工の鳥獣被害防止柵

んでいます。

武内さんは高齢で後継者がいないため、広島県に寄付することも含めて、この上中農園が継続して児童養護施設の子どもたちに利用してもらえる方法を検討してみましたが、いまだに思わしい結論は出ていません。



武内紀子さんとご主人